



渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2013-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): Fishery-related vocabulary, Oshima Peninsula, Ecological environment, Dialect 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2059

渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について

その他（別言語等） のタイトル	The Dialectal Words of Fishery and Maritime Things in the Eastern Coastal Region of the Oshima Peninsula
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	62
ページ	69-80
発行年	2013-03-18
URL	http://hdl.handle.net/10258/2059

渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について

橋本 邦彦^{*1}The Dialectal Words of Fishery and Maritime Things in the
Eastern Coastal Region of the Oshima PeninsulaKunihiko HASHIMOTO^{*1}

(原稿受付日 平成 24 年 6 月 15 日 論文受理日 平成 25 年 1 月 17 日)

Abstract

The purpose of this paper is to exhibit the local fishery-related words of the eastern region of the Oshima Peninsula which have been collected by our fieldwork, several documents of the dialectal dialogues, a dictionary of the Hokkaido dialect and the history book of Todohokke. They include dialectal words written in *katakana* letters, the corresponding forms in the standard Japanese language, the meanings with brief comments and the example sentences in use. We show that the vocabulary of fishery is closely related to the whole ecological environment, a place in which local fishermen work, such as specific kinds of fish, geographic features, tides and weather phenomena.

Keywords : Fishery-related vocabulary, Oshima Peninsula, Ecological environment, Dialect

1 はじめに

橋本・島田・塩谷(2012)では、2006年9月14日～16日に旧榎法華村（現在函館市恵山岬町、元村町、富浦町、島泊町、新恵山町、絵紙山町、新八幡町、新浜町、銚子町）で実施された元漁師（1924年生れ）への聞き取り調査記録から、「少年時代の漁業の手伝い」と「北方領土への出稼ぎ」の部分を文字起こしし、標準日本語訳を付けた。この研究報告により、戦前戦後の漁業とそれに従事する人々の生活の実態が明らかになると同時に漁業に関連する特有の語彙を見出すことができた。記述された事柄の多くは、石垣(1980)の明治、大正、昭

和生まれの3人の漁師への聞き取り調査の内容とも重なる。

二つの聞き取り調査で挙げられた漁業関連の用語、事物、出来事等が具体的にどのようなものであるかを確認する目的で、2011年9月7日～9日に函館市榎法華支所、函館市灯台資料館、戸井郷土館を、2011年10月22日に北海道開拓記念館を、2011年11月26日～27日青森みちのく北方漁船博物館、青森県立郷土館、函館市北洋資料館、函館高田屋嘉兵衛資料館を訪ねて調査をした。この調査を通してかなりの数の文献（紀要論文、研究報告、小冊子等）及び展示写真（デジタルカメラ撮影）が収集された。この調査の成果の一部は、橋本(2012)に反映されている。そこでは漁船関係の語彙として、船舶の名称と船舶部位の名称、さらに

^{*1} 室蘭工業大学 ひと文化系領域

漁具・漁法関係の語彙としてイカ釣り用の漁具・漁法関係の言葉が主に採り上げられた。

本稿は、紙幅の都合で橋本(2012)では扱わなかった漁船、漁具、漁法、加工処理等の漁業関連語彙の名詞と動詞、漁業と密接に関係する海事語彙及び地名等の意味と用法を、解説と用例を随時加えながら提示する。データ資料として、島田・橋本・寺田・塩谷(2001, 2003, 2004)、橋本・島田(2006)、橋本(2011, 2012)、橋本・島田・塩谷(2012)、石垣(1980, 1983)、榎法華村(編)(1989)(以降、『村史』と略記)、類家(2007)に記録されたものを用いる。

第2節では、漁船・漁法・漁具・加工処理等の関連語彙を、名詞と動詞に分けて提示する。第3節では、気象、地形などの海事語彙を、第4節では、古い地名を挙げる。語彙の提示の仕方は、原則、あいうえお順とし、各項目にカタカナで方言形を、ひらがな・漢字で標準形を、最後に意味・用法等の解説や用例を付す。

2 漁船・漁具・漁法・加工処理等の語彙

2.1 節で名詞を、2.2 節で動詞を扱う。

2.1 名詞

- (1) アガシヤク：あか杓：船に入った水を掻き出すひしゃく。
＜島田・橋本・寺田・塩谷 2003: 92＞
- (2) アシ：浮子（うき）：地引網の部位。
＜村史 1989: 599＞
- (3) アシダナ（アバダナともいう）：浮子網（うきあみ）：地引網の部位。
＜村史 1989: 599＞
- (4) アシカタ：あし方：舳先に配置された人。通常二人である。c.f. (6)アバカタ
＜村史 1989: 602＞
- (5) アトガケ：後掛：魚群が左方から来るか、網船の左方で魚群と遭遇する際、船を左に転じ、左翼より右翼に網を広げること。
＜村史 1989: 603＞
- (6) アバカタ：あば方：艀に配置された人。通常二人である。cf. (4)アシカタ
- (7) アミタキブネ：網たき船：網を積んでゆく船。イワシ漁船で、積載量の最も大きい胴船を使用した。大規模な地引網漁業用の船。
＜石垣 1983: 33A＞、＜村史 1989: 596＞
- (8) イセ：縮綴：イワシ漁に用いる地引網の部位。袖網を連続するのに、浮子網及び沈子網を結び留める。なお、地引網は1個の囊網と2張の袖網から成る。
＜村史 1989: 598-599＞
- (9) イワシカス：鯛粕：多く獲れたものを大釜（五右衛門釜）で煮熟して、肉骨一緒に絞る。油と水とに分けて、油だけを汲む。
＜橋本・島田・塩谷 2012: 80＞
- (10) オキアゲ：沖揚げ：①漁場で網に入った魚を汲みあげ、陸に運んで廊下または魚坪（なつぽ）に入れること。
「ソーシテ コンドサー オキアゲスル（そうして 今度はねえ 沖揚げをする）」
＜石垣 1983: 63A＞
②坪囊中の魚を船に移して、これを陸上に輸送すること。
＜村史 1989: 604＞
- (11) オヤナワ：親縄：はえ縄の部位で、幹縄のこと。c.f. タラナワ（鱈縄）、(32)ドー（胴）。
＜村史 1989: 570＞
- (12) カニ：かに：昭和初期のイワシ漁で用いる漁具名。
＜村史 1989: 611＞
- (13) ガニナワ：がに縄：昭和初期のイワシ漁で用いる漁具名。
＜村史 1989: 611＞
- (14) ギバ：ぎば：はえ縄の部位で、浮標縄のこと。c.f. セナワ、タチモノ。
＜村史 1989: 570＞
- (15) ギバダル：ぎば樽：浮標。c.f. シラセ。
＜村史 1989: 570＞
- (16) クキ：群来：魚の大群。ニシン、ハタハタ、イカだけでなく、榎法華では、イワシについても使われる。
「昭和2年から3、4年にかけて、イワシの大群来で浜は沸いた。」
＜石垣 1980: 14＞
- (17) クミブネ、クミフネ：汲船：魚を汲み取って陸に輸送する船。持府船（もちぶせん、もちつぶせん）を使用。
＜村史 1989: 604＞、＜石垣 1983: 116B＞
- (18) コイルヤン：こいるやん：昭和初期のイワシ漁の漁具名。
＜村史 1989: 612＞
- (19) ゴエモンガマ：五右衛門釜：イワシ粕を作る際にイワシをゆでる釜。
「イワシトッテー イワシトレバー イマ

- ミタイニ ノー ナマデサー ソッチャヤル
ルコッチャヤルンデワネンダカラ ゼン
ブジブンデ ソイコサー ゴエモンガマデ
ノー タイテー (イワシを獲って イワシ
を獲れば 今みたいに ねえ 仕事を分業
でやるのではないのだから 全部自分で
それこさあ 五右衛門釜でねえ ゆでて)
<橋本・島田・塩谷 2012: 80>
- (20) ゴロタ (ヅリ) : 手釣り : 江戸時代からのタ
ラ漁の漁具。タラの手釣り。道南で多く用
いる。
<石垣 1983: 139B>、<村史 1989: 580>
- (21) サカナ : さかな : 昭和初期のイワシ漁の漁具
名。
<村史 1989: 613>
- (22) ザルアミ : ざる網 (角網) : ①蝦夷時代のニ
シンの漁法の一つで、その形がザルに似て
いる網のこと。
<石垣 1983: 150A>
②楸法華では、明治時代のイワシ漁で曳網
(地引網) と共に用いられた。年間での使
用時期は11月1日~12月25日頃。
<村史 1989: 127>
- (23) ジャミイワシ : 小鯛 : イワシの小さいもの。
ヒコイワシともいう。
- (24) スド : すど : ①地引網または大謀網などの最
奥の魚だまり、または袋網。シトともいう。
<石垣 1983: 178B-179A>
②昭和初期のイワシ漁の漁具名。
<村史 1989: 611>
- (25) センド : 船頭 (せんどう)
- (26) タエマヅ : 松明 (たいまつ) : 楢 (なら) の
木を切ってきて、生の間に半分くらいまで
マサカリで先を割って作った。松明は漁の
際に沖で振り回す合図に用いた。
<石垣 1980: 27>
- (27) ダンプ : だんぷ : 浮き玉。ガラス玉。樽や木
材に穴を開けて作った浮子 (アバ) の総称。
<石垣 1983: 203B>、<村史 1989: 612>
- (28) ツボガケ : 縮掛 : 魚群が密集しているか、隣
の網と接近して余地のない時に、半円形に
網をおろし範囲を狭めること。
cf. (41)ヒラガケ
<村史 1989: 603>
- (29) テイシ : 手石 : 沈錘。cf. セギイシ (脊石)、
ナツイシ (なつつ石)。
<村史 1989: 570>
- (30) デメントリ : 日雇い労働者。日雇い仕事、ア
ルバイト。デメンともいう。
「ハダラクテユヨリモ ハダラグドゴ
ネンダモン。ハルノカツオホシドカ。ア
レワ マンダ マズ デメントリトイッテ
イマユー アルバイトシタイテ。(働くとか
働かないという問題ではなくて 働く所が
ないんだから。春の鰹干しとか。あれは ま
だ まず 日雇いの仕事をしたがって 今
で言う アルバイトをしたいって。)
<島田・橋本・寺田・塩谷 2004: 80>
- (31) テンテンズリ : てんてん釣り : 一本釣り。マ
ス釣漁法の一つ。テンテンともいう。
「マスガ エヤ アガッタノ ナンダッ
テ。……ソエデ ハリ エッポンダテ
テンテンバリ エッポンデ ツッタンダデ。
(鱒が いや あがったのなんのっ
て。……それで 針 一本だよ てん
てん針 一本で 釣ったんだよ。)」
<石垣 1980: 79、1983: 224B>
- (32) ドー (ドー) : どう : イワシ粕を絞る道具。
「アーユーマルイノー マンナカニ コー
ミズアッタシ コーアッテー デ ソイコ
サー ワレワレ ソノー ダラダラスルカ
ラ ドードーッテユッタモンダケドネー
(あのような丸いのを 真ん中に こう
水があったし こんな風にあって そのう
水が垂れるから どうどう (胴胴) って言
ったもんだけどねえ)」
<橋本・島田・塩谷 2012: 80>
- (33) トワイン : とわいん : トハインともいう。昭
和初期のイワシ漁の漁具名。
<村史 1989: 611>
- (34) ナヅイワシ : 夏鯛 : 7~8 月に獲れるイワシ
をいう。アキイワシ (秋鯛) は 10~12 月に
獲れるイワシ。
<石垣 1983: 25>
- (35) ナツボ : 魚坪 : ①魚を入れる場所で、竹など
で囲んでニシンを収容し、処理作業をした。
<石垣 1983: 242B>
cf. ソトナツボ (外魚坪) ⇔ ウチナツボ (内
魚坪) <類家 2007: 65>
②楸法華では、イワシの収容に用いた。
<村史 1989: 604>
- (36) ニンプ : 漁夫
<石垣 1980: 25>
- (37) ネジリ : 捻り : (45)マッカと共に、コンブ採

- 取用の漁具。茅部、山越、亀田方面で用いられた。
 <村史 1989: 542>
- (38) ノーセン：囊船：囊を保持する船。胴海船または胴船を使用する。
 <村史 1989: 604>
- (39) ハナアブ：鼻泡：魚群が吐き出す水泡が浮上すること。
 <村史 1989: 602>
- (40) ハネ：跳ね：魚が水面に跳躍すること。
 <村史 1989: 602>
- (41) ヒラガケ：開掛：魚群が薄い時に、網を弓形におろし、範囲を広げること。
 cf. (28)ツボガケ
 <村史 1989: 603>
- (42) ボイルカップパ：ぼいる合羽：油を塗って水を弾く合羽で、波除に漁で使用した。油の臭いで、船酔いの原因となった。
 「エマノ ボイルカップパッテ ホレ ホンダ サベタ アノ アブラ ヌベセ。ハナミネクテモ アレデ ハ ヨパラッテ シマウノセ。(今の ボイル合羽って ほれ あんた 言っていた あの 油を 塗るだらうさ。もう 波がなくても あれで もう 酔っぱらって しまうのさ。)」
 <石垣 1980: 67>
- (43) ホンガケ：本掛：網をおろす際に、右翼より投下し、右へ回って左翼に及ぶこと。通常の漁法。
 <村史 1989: 603>
- (44) マイ：枚：①イワシ粕を作る五右衛門釜の数え方。
 「オラドーアノー ホントノ チャッケコロ ジョーボシノ マエニモ エー アノ レンガデクンダ カマノアドトガ ダエブ ジューマイモ ナンポモ アッタエンタドモセー。(私たちのあの 本当の 幼少時に 上星(じょうぼし：屋号)の 前にも えー あの レンガで組んだ イワシ釜の跡とか 大分 10枚も いくらかも あったんだけどさ。)」
 <石垣 1980: 27-28>
 ②波の折りの数え方。
 「ナミガコゴデ オルナッテユーゴドニ ナッタナラバ コンド ソゴデノー トメデセ フネ トメデ コンダノー ナミガ ナンマイオッテ エグガッテゴド ミダノ。
- (波が ここで 折るなっっていうことになっただらば 今度 そこでね 止めてさ 船を 止めて 今度ね 波が 何枚折って いかかってことを 見たの。)」
 <石垣 1980: 70>
- (45) マッカ：まっか：海藻(昆布)採集漁具。
 <石垣 1983: 310A>、<村史 1989: 542>
- (46) マッケ：まっけ：建網を定着させるために海底に沈める一種の重り。
 <石垣 1983: 310>
- (47) マネ：まね：合図のために沖で振り回す松明の火。恵山の松の根を用いた。cf. マツブシ：五葉松。
 <石垣 1980: 26>
- (48) マンセン：満船：大漁。
- (49) ミズフネ：水船：波をかぶった船。
 <石垣 1980: 71>
- (50) ミヨシ：みよし：船首。
 <村史 1989: 602>
- (51) ヤメ：やめ：①はえ縄の部位で枝糸のこと。
 <村史 1989: 570>
 ②縄。網や釣り糸に使う綿糸。(採録地：松前・白神)
 <石垣 1983: 339A>
- (52) ユワシカゴ：鯛かご：獲ったイワシを入れる籠。cf. ユワシ：マイワシのこと。
 <石垣 1980: 78>、<石垣 1983: 344B>
- (53) ロップ：ロープ、綱
 <村史 1989: 613>
- (54) ワイヤ：わいや：昭和初期のイワシ漁の漁具。
 <村史 1989: 612>

以上、漁船・漁具・漁法・加工処理等の語彙について、54 の名詞が記載された。これらの語彙を概観して特記すべき事柄として、イワシ漁、イワシの加工処理に関する語彙が豊富であるということである。漁船名(7)、漁具名(8)、(12)、(13)、(18)、(21)、(22)、(24)、(33)、(54)、加工処理関連語彙(9)、(19)、(32)、(35)、(44)、(52)、その他(16)、(23)、(34)と、実に 19(35%) の語彙を数える。

さらに興味深いのは、(16)「クキ」が他地域ではニシンを中心とした魚の大群を指すのに対して、椴法華ではイワシの大群についても用いることである。同様に、(22)「ザルアミ」、(35)「ナツボ」が一般にニシン漁法で使われる語彙であるのに比べ、椴法華ではイワシ漁の用語となっている。これに(24)「スド」がイワシ漁の漁具名に特化されている

事実も加えることができる。¹⁾

語彙が、その指示する物、人、事象により何らかの影響を受けることはよく知られた事実である。渡島半島西岸部と比較して蝦法華を含む東岸部ではニシン漁は活発でない。その代りに昔からイワシが豊富に漁獲されたため、イワシ漁に関わる語彙が散見されるのであろう。元々ニシン漁と結びついた語彙がイワシ漁に転用されたものなのか、それとも東岸部と西岸部とで共通語彙が魚種の違いに応じて異なる対象を示すようになったのかについては、今後の調査に委ねなければならない。²⁾

(44)「マイ」は、波の折りの数え方ばかりでなく、五右衛門釜を数えるのにも用いたようであるが、釜全体に当てはまるのか、特定の部位を指すのかについては検証の余地がある。

『村史』(1989)には、数多くの漁具の部位名と漁法名が挙がっている。部位名は(2)、(3)、(8)、(11)、(14)、(51)の6語彙、漁法名は(5)、(28)、(41)、(43)の4語彙を数える。これらの語彙は、石垣(1983)の『北海道方言辞典』には掲載されていない。『村史』(1989)では方言として扱っている。たとえば、(51)「ヤメ」は、蝦法華では、はえ縄の部位の「枝糸」を指すのに対して、渡島半島西岸部の松前・白神では「網や釣り糸に使う綿糸」を表し、使用域が広い。それが事実であるなら、ここに記載された部位名以外の資料を、渡島半島東岸部だけではなく、西岸部とそれ以外の北海道各地、並びにかつて入植者を数多く送り出した津軽海峡の対岸の沿岸部にまで調査領域を広げ収集していく必要がある。

その他、漁の合図(47)「マネ」に用いた(26)「タエマヅ」の原材料がナラの木ではなく、地元恵山の「マツプシ(五葉松)」であるのも、語彙と地域の産物との結びつきを確認する上で興味深い。

2.2 動詞

漁業に関係した動詞は、2.1節の名詞よりも数の点で少ないが、方言の実態を知る上では、必要不可欠の品詞である。なるべく用例を付して記載することにする。

(55) アヅグナル：厚くなる：多くなる。

「ヤマデ(イカ釣り用漁具)ノホー エーノ。ヤマデダラ ニホンシカ ハリツイデネスケ。ノー ソレデ スコシ アヅグナレバ ナンモ オメー アレダ ソゴササゲネデ ハー ヤマデノ ソレデモツテ

ハー ソシテ ハー アゲルノセ。(ヤマデの方は いいの。ヤマデなら 二本しか針が付いていないから。ねー それで 少し(イカが)多くなれば なんにも おまえあれだ 底に 下げないで もう ヤマデの それでもって もう あげるのさ。)」
 <石垣 1980: 62>

cf. アツイ：ニシンの群来が多い。(採録地：余市)
 <石垣 1983: 28A>

(56) アミタグ：網たく：船の中央、すなわち胴の間に網を積む。
 <村史 1989: 602>

cf. アミタギフネ：網を積んでゆく船。(採録地：南茅部)
 <石垣 1983: 143B>

(57) オル：折る：波が折る。

「タエデー モー オガサ ツカグナッタ コロニナレバ ナミア ゴーット オツテクル。(たいてい もう 波打ち際に 近くなったところになれば 波が ごとと 折ってくる。)」
 <石垣 1980: 71>

(58) カグ：漕ぐ。

「エマ エー ブレクルド。サーカゲツテ エナモンデ ソノヅギア モー ハー ムジューダ。シンケンニナツテ カグ。(今いい ブレ(波と波の間の波のない状態)が来るぞ。さあ(櫂で)漕げってなもんでその時は もう はー 夢中だ。真剣になって 漕ぐんだ。)」
 <石垣 1980: 70-71>

(59) カグ：掻ぐ：掻き出す。

「アガカグ アノシャク アノカグヤツネ。(水を掻き出す あのひしゃく あの掻き出すやつね。)」
 <島田・橋本・寺田・塩谷 2003: 89>

(60) カパガル：ひっくり返る。

「ドゴダガノ フネ カパガッタトガ ミズフネニ シタトガテ(どこだかの 船がひっくり返ったとか 水船にしたとかで)」
 <石垣 1980: 71>

(61) クマラガス：(釣り糸を)からます。

「ハー アセシテノー クマラガシテ ワガネノ。(もう 焦るからねえ (釣り糸を)からまして だめなの。)」
 <石垣 1980: 62>

- (62) サガス：裂かす：(魚等を) 処理する。
 「(イカの処理について) カガダヂ ツレデ
 キテネ ジブンデ サガシテ ソシテ ミ
 ナ ショーガヅマデニ カエッタモンダ。
 (妻たちを 連れてきてね 自分で (イ
 カを) 裂かせてね そして みんな 正月
 までに 帰ったもんだ。)」
 <石垣 1980: 77>
 cf. サカス：生ニシンを処理する(採録地：
 厚田) <石垣 1983: 143B>
- (63) ショウ：背負う：(船で) 運ぶ。
 「コムギモ ナンデ ソーユーショクリョ
 ーヒン ゼンブ ハイキューデショ。ソノ
 ハイキュー モラウンダッテ ホラ ナツ
 ノウチワイイサ ノ。フネデショッテイッ
 テ モラッテクレバ イインダカラ。(小麦
 も 何でも そういう食料品は 全部 配
 給でしょ。その配給品を もらうんだって
 ほら 夏の間はいいさ ね。船で積んでい
 って もらってくれば いいんだから。)」
 <橋本・島田 2006.9.15.Track 31>
- (64) ツカゲラレル：(波に) 襲われる。
 「シギジレバ ノー オガサ コネウヂニ
 ナミネカッテ ツカゲラレデシマッテ ハ
 ー ミジブネニ シテシマウノサ。(失敗す
 れば ねえ 陸に 来ないうちに 波のため
 に 襲われてしまって もう 水船に
 してしまうのさ。)」
 <石垣 1980: 71>
- (65) トックレガエス：ひっくり返す。(船を) 転
 覆させる。
 「ミズブネニスレバ ノー フネ トック
 レガエシネエニシテ ハー ノー ソシテ
 ヨーヤゲ ハー カロージテ オガサ フ
 ネツケルノモアル。(水船にすれば ねえ
 船が 転覆しないように もう ねえ そ
 して ようやく はあ 辛うじて 陸に
 船をつけるのもある。)」
 <石垣 1980: 71>
 cf. トックリガエス：ひっくり返す<他動詞
 >、トックリガエル：ひっくり返る<
 自動詞>(採録：楳法華)
 <石垣 1983: 230B>
- (66) マネアゲル：合図を上げる：①魚見船(磯船
 か持符船を使用)に乗った船頭・下船頭(オ
 ヤジという)、経験のある漁夫が沖で魚群を
 認めた時に、旗か他の物を振って網船に沖

へ出るよう合図をすること。

<村史 1989: 602>

②火の合図を上げること。

「アギンナバ ホレ タエマヅ ヤマサ
 トンニエッタリ エサンノヤマサ ホレ
 オギデ フルマス マネアゲデ アノ マ
 ツブシノ アーユーノ トンネエッタノ。

(秋になれば ほら 松明を 山に 採り
 に行ったり 恵山の山に ほら 沖で 振
 り回す 火の合図を上げて あの 松の株
 根の ああいうのを 採りに行ったの。)」

<石垣 1980: 26>

動詞は 12 個である。(55)「アヅグナル」、(62)
 「サカス」は石垣(1983)によれば、余市、厚田の渡
 島半島西岸部でニシンについて述べるのに使用さ
 れるのに対し、楳法華ではイカとの関連で用いら
 れる。

(57)「オル」、(60)「カパガル」、(64)「ツカゲラ
 レル」、(65)「トックレガエス」は波の状況と船の
 操作との間で生じるよくない結果を表す動詞であ
 る。

(58)と(59)の「カグ」は同音語の例である。標準
 語では、前者は「こぐ」、後者は「かく」で区別で
 できるが、東岸部方言の音声上の特徴により同じ音
 として実現している。(63)「ショウ」(標準語「せ
 おう」)の用法は、慎重に扱う必要がある。本来は、
 人間等が荷物を背負う意味で用いられる動詞であ
 る。したがって、人間が配給品を背負った上で船
 に乗り込む事態を取り込む形での用法とも解釈で
 できる。そうではなく、本稿での説明のように「(船
 で) 運ぶ」意味があるのであれば非常に面白いが、
 確認のためにはさらに調査しなければならない。

類家(2007)によると、渡島半島西岸部に位置する
 松前町白神地区で、次のような動詞が採録されて
 いる。これは、昭和 42 年にニシン漁業に従事した
 古老の聞き取り調査で記録されたものである。

(67) コナレル：①(魚の) 鮮度が落ちる。

「手がまわらなくなると(人手がなくな
 る)ニシンがコナレテしまうので、カズノ
 コをとって、あとはニシンカスをたいた。」

<類家 2007: 49>

②カズノコがしまる。(採録地：奥尻)

<石垣 1983: 136A>

(68) タタク：刻む。

「樽に入れている海苔を、細かくタタク。」

<類家 2007: 11>

- (69) ツカレナイ：鮮度が落ちないようにする。

「ニシンがツカレナイようにする。」

<類家 2007: 65>

- (70) ヤケル：①（早く）腐る。

「(砂の上に直接おくと) ニシンがヤケテシマウ。」

<類家 2007: 65>

②のぼせる；いらだつ。

<石垣 1983: 333A>

(67)「コナレル」、(68)「タタク」、(69)「ツカレナイ」、(70)「ヤケル」は魚の加工処理に関連した語彙で、石垣(1983)の方言辞典では(67)②、(70)②の意味が載っているが、類家(2007)で記載された意味は見当たらない。

3 海事語彙

海事語彙とは、波や潮流、風や天候、地形など漁業を取り巻く環境に関連した語彙をいう。地理上の場所と密接に結びついているので、参考に渡島半島全体の地図を挙げておく。



図1：渡島半島全体地図

(『INFORMATION HOTEL 恵風』より引用)

- (71) アイマワリ：①ヤマセがおさまった後に海岸に押し寄せる大きなうねり。秋口に多い。

「ほれ、アイマワリで転覆した船あったでしょう。」(採録地：知内、樞法華)

<石垣 1983: 18B>

②東から吹く風を指す場合もある。樞法華の漁師によると、この風が原因で、川崎船でイカつけした船が昼によく転覆した。

<石垣 1980: 71>

cf. アイ：東風の異名。主として日本海沿岸地方でいう。アイの風、アユの風ともいう。

<半藤・荒川 2001: 12-14>

- (72) イルル：入り江。

「アコワ ナンカヤー。イルルノカワバ ナンテューネー。(あそこは 何て言ったっけ。入り江の川は 何て言ったっけね。)」

<島田・橋本・寺田・塩谷 2004:81>

- (73) ウチコミジョ：うちこみじお（打込潮）：上げ潮と下げ潮のぶつかり合うところ。

「<古語>うちこみしほ『かみ潮としも潮の入り合うことあり、うちこみしほとてよからぬ潮とぞ謂ひける』<えみしのへさき>」

<石垣 1983: 50A>

cf. 恵山の打込潮：沖合より沿岸を掠めて東南に流れる潮流。この潮の勢いのある時には豊漁と言われる。

<村史 1989: 569>

- (74) エサンジョ：えさんじお（恵山汐）：内浦湾より茅部に沿い、東南外海を流れる潮流；底流と皮流とも同一方向に流れる。

<村史 1989: 569>

鹿部方面（北西）から恵山方面（南東）に向かって流れる潮。

<石垣 1983: 55B>

- (75) オガ：陸（おか）：①波打ち際。波はオガで白くなり、折るのが遠目に見える。

「ナミア オガデ シログナッテ ナンポヨルデモ シログナッテ ナミア オルノミエルンダカラ。(波は 波打ち際で 白くなって いくら 夜でも 白くなって 波が 折るのが 見えてるんだから。)」

<石垣 1980: 70>

②陸地という時もある。

「フネモナモ ナガノモノモナモ チャントモー セーリシテ ソシテ シズガーニ オガサノー カエデキタノ。(船も何も 中の物も何も ちゃんともう 整理して、そして 静かに 陸にねえ 漕いできたの。)」

<石垣 1980: 70>

- (76) オリ：折り：沖から寄せてくる波が、海岸近くになって盛り上がり一気に崩れる様をいう。

「ナミア ドノヘンデ オルガッテゴトヲ
エヂバンサギニ ソノー カグニンシタワ
ゲセ。(波が どの辺で 折るかってことを
一番先に そのう 確認したわけさ。)」

<石垣 1980: 70>

- (77) カヤベジヨ：かやべじお（茅部汐）：東南外
海より内浦湾に入る潮流；底流と皮流は全
くその方向を異にする。

<村史 1989: 569>

- (78) サギ：さき（先）：岬。

「オナジサギデモ ココ モトムラッテド
ゴダシ ココカラニキロクライイッタドゴ
ニ トミーラッテドゴ アルンスヨ。(同じ
岬でも ここは 元村っていう所ですし
ここから 2 キロくらい行った所に 富浦っ
ていう所があるんですよ。)」

<島田・橋本・寺田・塩谷 2003: 88>

- (79) サギリ：波しぶき：普通、波は5回来るうち
2回は大きい。その大きい波のことをいう。
「ハマサイゲバ サギリカブル。(浜に行け
ば 波しぶきをかぶる。)」

<橋本 2011: 121>

- (80) ズレ：波と波の間の波のない状態。

「エーズレ クルド。(よいズレが 来る
ぞ。)」

<石垣 1980: 70>

- (81) ショ：①しお、塩、②潮流

cf. ショアンベ：潮流の具合

「アミ フッパルニ サンツカンモ ヘダ
セバ ショアンベワリバ ゴンツカンモ
ノー ログジカンモ カガッテ (網を 引
っ張るのに 3 時間も 下手をすれば 浪
の具合が悪ければ 5時間も ねえ 6時間
も かかって)」

<石垣 1980: 24>

- (82) ヒカタ（カゼ）：南西風：8月から翌年4月
頃まで吹く風。ヒカタ、シカダともいう。
海難事故が多い。

「一番恐ろしい風はシカダだ。」(採録地：
尻岸内)

<石垣 1983: 272A>

- (83) モヨー：空模様

「モヨーワリグナッテ トヂューデ ヨナ
ガニ エサ モドネバネ。(空模様が悪くな
って 途中で 夜中に 家に 戻らねばな
らない。)」

<石垣 1980: 69>

- (84) ヤマセ：やませ：①東風

「キョーワ ヤマセダガラ ウミ シケダ
ド。(今日は やませ(東風)だから 海が
荒れるぞ。)」

<楳法華弁>

②東風（函館）、南東風（知内・小谷石）、
北東風（函館）：本来、山を背にして吹く風
で、日本海岸では東寄りの風のこと。海は
しける。

<石垣 1983: 337B>

ここに掲載した14語彙のうち、風を中心にした
気象語彙が(71)「アイマワリ」、(82)「ヒカタ／シカ
ダ」、(83)「モヨー」、(84)「ヤマセ」の4つ、波や
潮流の状態に関わる語彙が(73)「ウチコミジョ」、
(74)「エサンジョ」、(75)「オガ」、(76)「オリ」、(77)
「カヤベジヨ」、(79)「サギリ」、(80)「ズレ」、(81)
「ショ」の8つ、地形の名詞が(72)「イルル」、(78)
「サギ」の2つである。漁業にとって風という気
象現象は大いに関心の向けられる話題であり、呼
び名の数も多い。類家(2007)では、上記の語に加え
て、風やそれに関係した語彙として「バケ（岩木
山が近くなり、権現岬がバケて見えると、南風か
らヤマセになる)」、「アクナヤマセ（月に暈がかか
ると、アクナヤマセが吹き荒れる)」、「ボタ（雲)」、
「ボタヤマセ（ぼた東風：天気はよいが、風が10
～15日も続く)／アガヤマセ」が確認できる。また、
淡斎如水(1848)『松前方言考』(『北海道のこと
ば』(1999)に収録)には、「アブラナギ（油風：海
上が穏やかで風浪のない状態)」、「アマモヨ（雨模
様：空の様子が悪くて、雨・雪が降りそうな様)」、
「ヨイチ(余市：東北東と東の間から吹く風)」、「タ
バカゼ（玉風：西北の方から吹く風)」、「トウゼン
ボウ（通せん坊：4月8日に吹く風)」、「クダリカ
ゼ（下り風：南と西南西の方から吹く風)」が挙げ
られている。

これらの語は、地形や方角など用いられる地域
の地理的特徴に依存している。また、漁業従事者
にとって作業の条件を左右することから、地域に
特有の風にのみ関心が向いているとも考えられる。
楳法華を中心とする渡島半島東岸部地域の漁師に
とって、3つの風のみが関心の対象であるのか、そ
れとも松前を中心とした地域で採集されたような
語彙があるのかは、地形の情報を踏まえての今後
の調査に委ねられよう。

潮流も、風と同様、漁業を営む上で、大いに関
心の持たれる海事現象である。「エサンジョ」、カ

ヤベジョ」に見るように恵山岬、南茅部という地理的要所と結びついた名称や、細かく観察してきた経験によってのみ得られる波の呼び名は、漁業に特徴的な語彙である。

4 地名・その他

第4節では、手元にあるデータから旧地名を記す。行政上の地名は2004年12月の榎法華村、戸井町、恵山町、南茅部町の函館市への編入に見るように、時代とともに変わり得る。一方で、旧名が地元での通称として使用されていたり、学校や神社の名前の一部を構成していたり、住民の記憶に残っている場合がある。ここで収集された資料は、橋本・島田・塩谷(2012)、石垣(1980, 1983)、村史(1989)などで採録・記録されたものであり、特に、方言語彙と関わりのあるように思われるものを記載した。

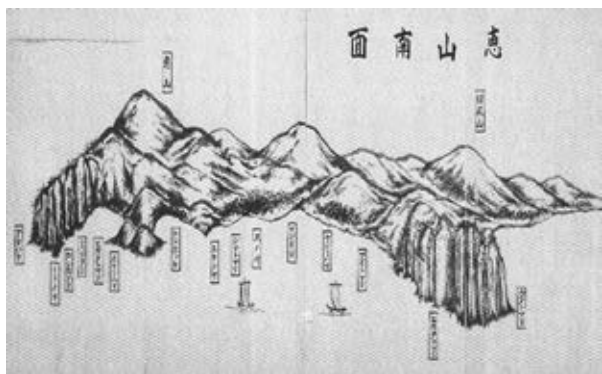


図2：恵山南面地図：弘化2~4(1845-1847)年頃
(函館市灯台博物館所蔵)

参考資料として、松浦武四郎著『蝦夷日誌』(1846)所収の地図(図2)を付す。

また、恵山岬西側を含む地名の書き込まれた地図3(松浦武四郎著『東西蝦夷 山川地理取調図』(1855)、村史(1989)より引用)も、次に掲げる。

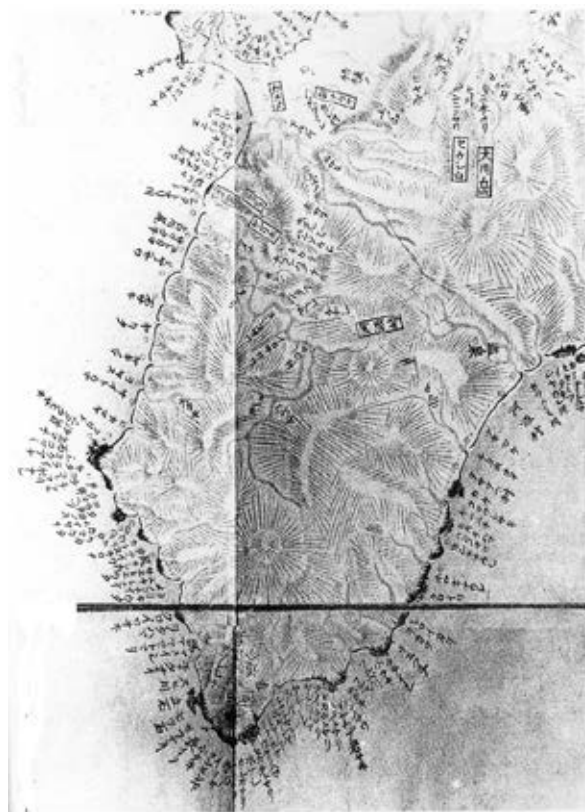


図3：松浦武四郎著『東西蝦夷 山川地理取調図』
(『榎法華村史』(1989)より引用)

- (85) アイトマリ：あい泊：現在の銚子岬の北東岸にある地名。
cf. アイノカゼ：北東風。主として北寄りの風。土地によって北東もあれば北西の風もいうが、地形から推すと、常に海岸線と直角に沖から吹く風である。
<村史 1989: 755>
cf. トマリ：泊：船着き場
- (86) アカハケ／アカハゲ：赤元岬：現在の恵山岬最南端、トド岩の下、旧恵山町と榎法華との境界付近に位置する。波が荒く、小舟で近づくのは危険である。
<村史 1989: 758>
cf. アカ：水、ハケル：走る(カケルの音転)「ハケロ、ハケロ(運動会での声援)」(採録地：尻岸内)
<石垣 1983: 260A>
- (87) イソヤ：磯谷：恵山沿岸、恵山岬の南側にある。
「イソヤダトカサー ネタナイダトカ フタツイニモ ミツツニモ ナッテアッタンダー トージワノー。(磯谷だとかね 根田内だとか (村が)二つにも 三つにも な

- っていたんだ 当時はねえ。)」
 <橋本・島田 2006.9.15. Track29>
- (88) カシカンリ：現在の恵山岬南東にある。
 <村史 1989: 755>
 cf. カシガル：傾く
 「船がカシガルから片側にばかり寄るな。」
 (採録地：函館)
 <石垣 1983: 80B-81A>
- (89) カケノハマ：かけの浜：現在の恵山岬南東地域。
 <村史 1989: 756>
 cf. カゲル：(風・吹雪が) 吹く
 「シタギカゲデ ユルグネガッタデ。(吹雪が吹いて 苦労したよ。)」(採録地：知内・小谷石)
 <石垣 1983: 79B>
- (90) カヂカソリ：恵山の東南の岬。岩磯が平坦で、カジカが多く生息するので、この名が付いたという。
 <村史 1989: 758>
 cf. ソリ：暗礁
 「そのあたりソリがあるから気をつけれ。」
 (採録地：松前・白神)
 <石垣 1983: 189B>
- (91) シマトマリ／シュマトマリ：島泊：現在、富浦、榎法華漁港方面へ向かう最初の地区。
 <村史 1989: 755>
 cf. シマ：はじ・すみ。スマともいう。
 「そんなシマにいないでここに来い。」
 (採録地：森)
 <石垣 1983: 162B>
- (92) シモカイガン：下海岸：松前から遠い、亀田郡の地方。開拓の最も古い地方で、青森県、わけても、下北半島からの移住者が多い地方。戸井町、尻岸内町、榎法華等。
 <石垣 1983: 164A>
 「コノシモカイガンダラ シモカイガンデネバノー コノスルメエガテーノ トレネアガンナガッタダカラ (この下海岸なら下海岸でなければならぬ このスルメイカっているのは 獲れない 上がらなかつたんだから)」
 <石垣 1980: 76>
- (93) ジョーボシ：上星：屋号。
 cf. ジョーボシカワグチ：戦前、榎法華村で人を雇って大規模に網で魚を獲っていた網元。
 「カワグチッテユー ジョーボシカワグチッテノー デーケーヤッテンダ シトタノンデ ホラ ハタラキニクルシトヤトッテー デ ソシテ イワシトッテー (川口っていう じょうぼし (上星) 川口ってねえ 大規模にやってんだ 人に頼んで ほら 働きに来る人を雇って で そしてイワシを獲って)」
 <橋本・島田・塩谷 2012: 80>
- (94) ネタナイ：根田内：恵山沿岸磯谷の西隣にある。
 「コッカラサー チョットエサンマデ フネデモッテイケバー エサンマデナラ ホラ ムカシワネタナイッテイッタモンダケド イマミタイニ エサンデネーダ。ムカシミタイニ オレタチワ ネタナイッテイッテタモンダー。(ここからね ちょっと恵山まで 船で運んで行けば 恵山までなら ほら 昔は根田内って (恵山のことを) 言っていたけれどね 今のように 恵山ではないんだ。昔みたいに 私たちは 根田内って言ったもんです。)」
 <橋本・島田 2006.9.15. Track29>
 cf. ネタナイキリ：根田内切：根田内村から出る細葉の昆布。細葉を三尺あまり切ったもの。
- (95) ヒカタトマリ：ひかた泊：現在の銚子岬南西岸及び恵山岬南西岸の地名。
 <村史 1989: 755>
 cf. ヒカタカゼ：南西風。8月から翌年4月ころまで吹く強風。海難事故が多い。
- (96) ヤマセトマリ：やませ泊：恵山岬の東側、根田内の左隣にある地名。やませ風を避けるのによい場所。昆布小屋がある。
 <村史 1989: 758>
- 地名をめぐる語彙が12個挙げられたが、のうち恵山岬に関係する語彙が7つ((86)「アカハケ」、(87)「イソヤ」、(88)「カシカンリ」、(89)「カケノハマ」、(90)「カヂカソリ」、(94)「ネタナイ」、(96)「ヤマセトマリ」)、銚子岬関連が2つ((85)「アイトマリ」、(95)「ヒカタトマリ」)ある。図2の地図は現在の榎法華地域とほぼ一致するが、右手に突き出した銚子岬と左手に延びる恵山岬が丁度この地域の境界を形成していることがわかる。榎法華の漁業が昭和初期まで磯船のような無動力船で行われた沿岸漁業であった事実と照らすと(橋本

(2012))、漁業従事者にとってこの領域が生活圏なのである。特に、恵山岬近辺は豊かな魚田を有しているので、地形に基づく細かい命名がなされていったものと考えられる。

〈風の名称+トマリ(泊)〉の組み合わせが3つ((85)「アイ+トマリ」、(95)「ヒカタ+トマリ」、(96)「ヤマセ+トマリ」)あるのも際立った特徴である。風向きは漁にとって大切な情報源であり、時に命を左右する場合があるので、このような形の名称が成立したと考えられる。ただし、(91)「シマトマリ(島泊)」は、それが置かれた位置に基づいている。

地名の中に方言語彙が隠されている場合がある。(86)「アカハケ」であれば、〈アカ(水):名詞+ハケル(走る):動詞〉、(88)「カシカンリ」では〈カシガル(傾く):動詞+カンリ(?)³⁾〉、(89)「カケノハマ」では〈カゲル(吹く):動詞+ハマ(浜):名詞〉、(90)「カジカソリ」では〈カジカ(鰯):名詞+ソリ(暗礁):名詞〉である。これらは地形の特徴から名付けられたと考えられるが、地名から方言語彙を復元することの必要性を示唆してくれる例である。

北海道の地名はアイヌ語起源のものが多いが本節に現れる地名には(94)「ネタナイ」を除いてアイヌ語に由来するものはない。これは(92)の解説でも記したように、下海岸地方が比較的古くから(一説には鎌倉・室町時代から)⁴⁾和人によって開拓されたことに起因するのがその理由なのかもしれない。ただし、命名の捉え方はアイヌ語と同様、地形の特徴を取り入れている。

5 結び

本研究を通して判明した事柄は、次の4点である。

- 1)漁業関連語彙は、漁獲される魚種に規定される。橋本(2012)で明らかにしたように、渡島半島東岸部では、イカ漁に関連する語彙が豊富であった。これは、この地域沿岸部でイカが豊富に漁獲されることに起因する。同様に、イワシも主要な漁獲対象魚であるので、これと関係する語彙が漁船、漁具、漁法、魚の加工処理と広範囲に及んでいる。特に注目したいのは、渡島半島西岸部で盛んであったニシン漁と結びついた語彙が、ほぼそのままの形でイワシ漁に用いられている事実である。
- 2)漁具の部分名称に着目して、方言語彙を観察・

考察する必要がある。従来の研究では、漁具全体の方言名称は採り上げられていたが、それを構成する部位に触れられることは少なかったように思われる。村史(1989)には地引網等の部位名称について方言としていくつか言及されているが、石垣(1983)の『北海道方言辞典』にはその記載がほとんどない。これは、調査者側の関心が漁具の部位という細かい所にまで向かないので、その存在にすら気づかないからである。村史(1989)は、村の基幹産業である漁業について当然ながら熟知しているのであるから、漁業従事者の視点での記載がなされている。今後、学術研究資料として再評価すべきであろう。

- 3)地名の中に方言的要素が存在する場合がある。行政の都合により地名が変更されると、土地と生活の結び付きが不透明になる。旧地名を丹念に調べ、その中にある方言的要素を抽出・復元する作業は、方言研究にとって資すること大である。
- 4)地理的条件、気象、波や潮流などの環境から方言語彙を考察する必要がある。漁業関連語彙がそれに従事する人々の生活様式と関わるのはもちろんであるが、彼らを取り巻く環境にも深く依存している。いわゆる方言の「生態学的(ecological)」研究は、将来益々推進していかなければならない分野であろう。

謝辞

本研究は、平成23年度科学研究費補助金(課題番号:23520540)の交付を受けて行われた「旧榎法華における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」における研究成果の一部を発表したものである。現地調査を実施するにあたって協力して下さった共同研究者の室蘭工業大学教授塩谷亨氏並びに同大学准教授島田武氏に、深く感謝申し上げたい。また、貴重な資料と話し合いの機会を提供して下さった北海道開拓記念館学芸員の会田理人氏、及び価値ある資料と情報を見せて下さった戸井郷土館、函館市灯台博物館、函館市北洋資料館、みちのく北方漁船博物館に謝意を表したい。最後に、いくつかの誤りを指摘して下さったばかりでなく、有意義な意見をも寄せて下さった二名の査読委員の方々にもお礼を申し上げます。もちろん、本稿の誤り等の責任は筆者のみに帰すものである。

注

- 1) 査読者より(16)の「クキ」がイカ漁関連語彙とも重なるので、イワシ漁関連語彙をも加えて三者の重なりについて分析してはとの意見をいただいた。イカ漁は渡島半島東岸部にとどまらず、広く渡島半島一帯の漁場で盛んであるので、地域ごとの詳細な調査が必要である。現段階では、残念ながら比較するデータが乏しいので、将来の研究に委ねざるを得ない。貴重な意見に謝意を述べたい。
- 2) (22)「ザルアミ」、(34)「ナツボ」のように渡島半島西岸部ではニシン漁に、東岸部ではイワシ漁に使われる語彙の指示する対象物の形状や用法の違いについても考察していかなければならない。現在、手元に資料がないので、その収集及び聞き取り調査をする必要がある。
- 3) 語源不明。
- 4) 北の生活文庫企画編集会議（編）、1995、20-27 参照のこと。

文献

- 石垣福雄、『北海道（昭和55年度）各地方言収集緊急調査 文字化原稿：楳法華村』「1. いわし漁全盛のころ；2. 楳法華の祭り；3. いかつり漁法の今昔；4. 漁船の変化；5. 漁業後継者の問題」未公開原稿、1980、1-89（通しページ）。
- 石垣福雄、『北海道方言辞典』、1983、北海道新聞社。
北の生活文庫企画編集会議（編）、『北海道民のなりたち』、1995、北海道新聞社。
- 北の生活文庫企画編集会議（編）、『北海道のことば』、1999、北海道新聞。
- 島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨、「楳法華（とどほっけ）における言語と風習—失われゆく伝統」、『室蘭工業大学紀要』第51号、2001、173-182。
- 島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨、「楳法華（とどほっけ）における言語と風習—失われゆく伝統(2)」、『室蘭工業大学紀要』第53号、2003、87-97。
- 島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨、「楳法華（とどほっけ）における言語と風習—失われゆく伝統(3)」、『室蘭工業大学紀要』第54号、2004、79-90。
- 淡水如水、「松前方言考(1848)」、北の生活文庫企画編集会議（編）、1999、176-211。
- 楳法華村（編）、『楳法華村史』、1989、ぎょうせい。
楳法華村教育委員会（編）、『楳法華弁』、2000、楳法華村教育委員会
- 橋本邦彦、「楳法華の方言語彙について」、『北海道言語文化研究』第9号、2011、115-124。
- 橋本邦彦、「渡島半島東岸部の漁業関係の語彙」、『北海道言語文化研究』第10号、2012、23-37。
- 橋本邦彦・島田武、『楳法華方言調査：昔の漁業、その他について(2006年9月15日聞き取り調査) 文字化原稿』、Tracks 1-86（録音時間54分39秒）、2006、未公開原稿。
- 橋本邦彦・島田武・塩谷亨、「楳法華の漁業について」、『室蘭工業大学紀要』第61号、2012、77-88。
- 半藤一利・荒川博、『風の名前 風の四季』、2001、平凡社。
- 類家直人（編）、『復刻版松前古老百話・白神』、2007、松前古老百話・白神復刻実行委員会。